KSKQ第三種郵便物認可<サロン・あべの>通巻4804号2005年5月21日

サロン
よいとこ、
こんなとこ

サロン淀川

■出会いました・ふれ愛ました・助けられました

〈サロン・あべの〉4月の出会い

平成17年4月16日(土)、〈サロン・あべの〉4月の出会は、「サロンよいとこ、こんなとこ―出会いました・ふれ愛ました・助けられました―」と題して、「サロン淀川」代表の窪田新一さん(写真・次頁)にお話を伺いました。

・きっかけ

「サロン淀川」は、平成6年6月より活動開始。

サロン活動に関わるきっかけは、地域のボランティア・ビューローにボランティア登録をしていて、社会福祉協議会の人から〈サロン・あべの〉の活動の話を聞いて、「スバラシイ」「最高ですね」と相槌を打っているうちに、淀川でも「してみない・・・」という話になった。そしていつの間にか「やりましょう」に。

平成5年12月、開催場所や運営スタッフ探しに動き出す。無理のないようにしよう、助け合いながらやっていこうと思った。活動名は〈サロン・あべの〉が阿倍野区だから、淀川区のサロンということで「サロン淀川」と命名。

・準備

サロンの雰囲気を考えて、第1回目は地域のミニコミ誌を発行している「ザ・淀川」の南野編集長に話をしていただくことにし、参加者はボランティア・ビューローに登録している方に呼びかけて、とにかくスタートした。

スタッフは経理の出来る人や、会誌の発行なども考えて、公文の先生方に参加していただいている。

出発当初は、区社協や老人施設などあちこち、いろいろな部屋を開催場所に渡り歩いていた。が、淀川区在宅サービスセンターが開設されたことで、定まった所で開催

一九九一年九月三日第三種郵便物認可(毎日発行)

出来るようになった。ここは、三国駅から5分と交通の便がよい。また、区社協の職員の協力と好意のお陰で日曜日に開催出来るのが何より。加えてセンターの設備・備品を使って煮炊き（たこ焼きやカレー作り）は出来るし、プロジェクターが使えるのでビデオ鑑賞なども企画出来ている。地域福祉の一環としてサロン活動が認められており、会誌の印刷や製本・発送などの協力もしてもらっている。

・サロン活動

よく、サロン活動とは、何ですかと聞かれる。

サロン活動は、「子育てサロン」や「いきいきサロン」のように年齢制限があるようなものでなく、老若男女、障害のある人もない人も、すべての人が集まれる場所と考えている。サロンは行ける時に行き、帰りたいときに帰る。サロンが楽しみなだけではなく、その場の人に会えるのが楽しみという人もいる。毎回20名前後の参加者があり、その7～8割が常連さん。「コンボ」誌や「ザ・淀川」誌を見て参加する人がいる。かと思えば当初〈サロン・あべの〉に参加していた人で、淀川に出来てから、両方に出るようになった人もいる。

「サロン淀川」は、1歳半から、上は90歳近い人が参加している。参加したすべての人がいろんなことが言えるよう、輪になって行う。語り合うことでお互いに理解し、助け合う。片づける時もスタッフと参加者の関係ではなく、一緒にやっている。参加者全員がボランティアであり、自然にそういうことが出来てきている。

・サロンの人材

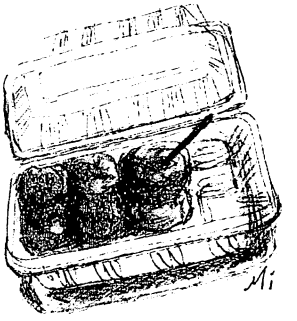
10年もサロンをしていると、毎月のパネラーをサロンに参加している人が見つけてくれたりする。自分の通院先の先生に肩こりの話を頼んだり、ふるさとの芋煮会をしたり、お寺の住職に話を頼んだりなどなど。また、私自身も各区のサロンに行ったり、イベントで親しくなった人に来てもらったり、あるいは偶然の出会いからサロンに来てもらった人もある。

風船で、出会いのきっかけ、
ふれあいのチャンスが・・・

また、サロンは、自分のスキルなもの、あるいは、得意芸を発表出来る場であると思う。趣味の写真や津軽三味線・太鼓などもあった。周りがなければ自分が動き、他のサロンに紹介したりされたり、人のつながりが楽しい。

活動の中でプライベートの趣味が活きることがある。それを大いに広げようと思っている。その一つにバルーンデザイン作りがある。風船で、出会いのきっかけ、ふれあいのチャンスをつかむことが出来る。例えば、街角で泣いている子に出会ったとき、その場でミッキーなど作ってやると出来上がるまでに泣き止んでしまう。この日も、話をしながら、細い風船をふくらませて、手際よく、ミッキー・クマ・キリンなどを作り、参加者の雰囲気を和ませた。

・運営資金



長蛇の列が出来るイベントの花
「サロン淀川」名物・たこ焼き

活動資金は苦しいものがある。大阪市社会福祉協議会の助成金と、いろいろなイベントに参加して、たこ焼きや似顔絵・マッサージなどの売上も資金源になる。また、参加者からのカンパなど、みんなの共感を得られれば物事は進む。

今後は、若い人たちの参加を呼びかけていきたい。

○

休憩の後、参加者に感想や質問を聞きました。

○ボランティア活動で、何かをしようと考えていたが、力まなくてよいと思った

○参加するのは2回目、今回も楽しかった

○〈サロン・あべの〉は20年目、サロン活動の原点である

○風船で作ったキリンが話のきっかけの小道具になるのを知って・・・よかった

お話の中で、サロン活動に出会ったことで多くの人と出会い、ふれあい、助け合いの輪が広がったと言っておられました。サロン活動の大切さを感じた〈サロン・あべの〉4月の出会いでした。

（見出し＝中西利香・筆）

（参加者13名　山村貴司）

サロンと私

〈サロン・あべの〉は、昭和61年3月に発足しました。阿倍野区に大阪市内で初めてのボランティア・ビューローが開所したのが昭和60年。このビューローに私はボランティアとして参加しました。が、私にとっては初めての地域参加であり、何が出来るかということもまったく分かりませんでした。ビューローに来られる地域の人も初めてお会いする方ばかりでした。でも、皆さん温かく接してくださり、来所の人たちとの会話も楽しくて、時のたつのを忘れるほどでした。そこでは、健常者も障害者も区別なく話し合いが出来ました。また、いろいろな障害のあること、また、その人たちが積極的に行動されていることも知りました。その雰囲気をもっと多くの人たちと共有したいと思ったのがサロン作りの始まりです。ビューローにボランティアとして受け入れてもらっていなければ、今の私は居ないと思いますし、サロンの形も変わっていたかもしれません。社会経験のない私が今日までサロン活動を続けて来られましたのは、多くの人の見守り、ご支援、ご協力があればこそと常に感謝の思いでおります。私にとってのサロンは、居心地のよいサンルームです。

（冨田慶子）

16

邦子、‥ん歳の手習い。

障害者の自立生活－障害者と当事者性－

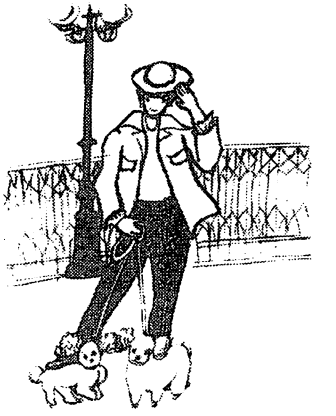
1987年からの夫のアメリカ留学は、中途障害者の夫と家族介護者である私にとって大きな意識改革をもたらしました。当時、障害歴10年足らずの夫にとって、まだ障害は空気のようなものではありませんでした。その頃、老後についてのインタビューを受けた時の夫の答えは、「僕は、多趣味なので老後は困らないが、幼い頃から障害を持って生きてきた人たちにインタービューをして、そのライフヒストリーを書きたい。」ということでした。それは障害歴の長い方々の生き方は、逞しく、学ぶべき事も多く、夫はまだまだその域に達していないという理由からでした。

老後の夫のライフワークとしての日本での障害者へのインタビューは出来ませんでしたが、バークレーで活動している障害者の自立生活者へのインタビューは、夫が、障害当事者として力強く生きていく新たな方向を示してくれました。

当時、バークレー大学は重度障害者にとって自立生活しながら学べるということで、要介護の障害者学生が全国から集まっていました。障害者は学生寮に入り、介護者を自分で雇って自立生活することを学びながら、学生生活を送るという方式です。学生寮には障害者学生の自立生活を支援する常駐スタッフがいて、介護者が来られなかった時や、緊急時に対応します。また、学生は自立生活を初めて経験する者がほとんどで、スタッフは自立生活の相談やアドバイスなどを行って障害者学生の自立を支援します。障害者学生は自立生活を学び身につけてから、地域に住居を見つけ、地域で生活するようになっていきます。

この学生寮での障害者学生への自立支援は、大学の障害者学生プログラムという中で行われるもので、このプログラムには、介助者紹介サービスや車いすの修理部門なども含まれていました。当時、障害者学生プログラムのスーパー・バイザーは電動車いすを使用しているスーザン・オハラさん（ポリオの障害者）でした。スーザンさんに最初にお会いした時に、お仕事をしている所を写真に撮ろうとした時、スーザンさんは背筋を伸ばして、「障害者のプログラムは障害者が自ら運営していることを撮って、日本で伝えてください」とおっしゃいました。夫はその言葉に

ありがとう。20年



<サロン・あべの>は20年になります。

深く感動したようでした。そして、スーザンさんに日本に帰ったら、大学に出来るだけ多くの障害者学生が入れるように頑張ると約束しました。

バークレー市には、障害者の自立生活を支援するための自立生活センターや世界障害者研究所などがありましたが、すべて障害者が主体になって運営されていました。そして、障害者の問題は障害者抜きにしては進まないと考えられていました。

今、障害者自立支援法案が進められていますが、介護の問題を含めて、現在の障害者の生活を脅かすものになるのではないかということで、法案阻止、あるいは、もっと時間をかけた慎重審議を求めて障害者を中心とする反対運動が起こっています。この法案やその問題点については、『サロン・あべの』紙で岸田美智子さんが詳しく説明してくれています。

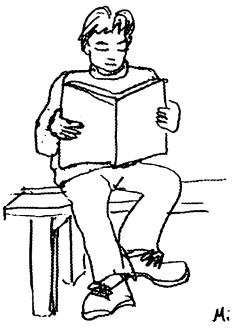
先に挙げたアメリカの自立生活や障害者のためのプログラムが障害者主体を原則としているのを考える時、法案が、障害当事者の声を聞き、それを反映したものとなることが大切であると思われます。

（定藤邦子）

晴れのち晴れ 80

鏡

稲垣恵雄



人は誰しも朝、目覚めると身だしなみを整えるために鏡を見る。いや正確には鏡を見るのではなく、鏡を通して自分の姿を映すのである。

いきなり唐突なことを書いて恐縮だが、仏法はなぜ聴聞するのかと言えば、人間は他人のことはよく分かるが自分のことはなかなか分からないので仏法という鏡を通して自分というものを知らせてもらうためだと言う。

鏡といえばこんなことを思い出す。かなり前のことだが、当時、人気のあった某国会議員がたびたびテレビに出演していた。その議員はなぜかテレビに出演するたびに人相が悪くなっていくので、自分は絶対あんな顔になりたくないと思っていた。ところがある日、私は何気なく鏡を見るとやつれた生気のない顔になり、恥ずかしくて他人に見せられるようなものではなかった。こういうことは1度になったのではなく、徐々に自分でも嫌な顔になってきたのである。これでは「あんな顔には絶対なりたくない」と思っていた某議員を責めることはできない、と深く反省させられたことがある。

ある本を読んでいると「人間はポケットに二つの鏡を持っている。その一つは他人を映す鏡で、実際よりも小さく映る縮小鏡。もう一つは自分を映す鏡で、実際よりも大きく映る拡大鏡である」と書いてあった。

この本の作者も言われているが、私たちはいつも自分の居心地の良いように、また自分の都合の良いように二つの鏡を自由自在に使い分けているのかも知れない。

習慣の力

通勤の際、私が乗る電車の車両は、いつも後ろから二番目、座る場所は車両の真ん中あたりである。晴れの日は進行方向に向かって右側、曇りか雨の日は左側に座る。これはもう何年も前からの習慣である。

その位置に座るようになった理由は、その場所だと降りたときに出口が近いこと。事故があっても一番後ろよりは安全だと思い込んでいること。車両の真ん中あたりに座るのは、その位置が一番揺れが少ないと聞いたことがあり、眠るにも読書するにも最適の場所だと信じているからである。晴れた日に右側に座るのは直射日光を避けるため、曇りの日に左側に座るのは、乗車口に遠く、したがって比較的静かだと思っているからである。もちろん、そんなことをいちいち考えながら、席を選んでいるわけではない。もう習慣なのである。だから何も考えないで、そこに座っている。私はそれに満足している。なぜなら、どこに座ろうかと考える手間が省けるからである。

駅に行くまでの道順も同じだ。全く同じ道を歩いている。「たまには変えよう」という気持ちもない。だいいち、どの道を歩こうと考えなくても歩けるのが良い。家を出て足を踏み出せば、もう何分後にどこに着いているか、はっきりとわかるのである。

実は、こんな調子で生活の万事を行いたいというのが私の理想である。つまり、できるだけ多くのことを習慣にしてしまう。すると、迷ったり選んだり考えたりする必要がな

お知らせ

〈サロン・あべの〉6月の出会い

内　容…サロンよいとこ、こんなとこ
　～出会いの輪、笑いの和、そして、
　もうひとつの「わ」を求めて～
お客さま…中本勝也さん
　（「サロン・にしよど」代表）
日　時…6月18日（土）午後1時～4時
場　所…育徳コミュニティセンター2階
　研修室（スロープ・車いすトイレ有）
　大阪市阿倍野区阪南町5－15－28
　TEL 06－6621－1901
　最寄り駅＝
　地下鉄御堂筋線「西田辺」
　赤バス「育徳会館」下車すぐ
会　費…なし
問い合わせ先…
　TEL 06－6691－1028（冨田慶子）

くなる。これからどうなるか、数時間後の未来が予想できる。安心して時の流れに乗っていけばいいのである。

しかし理想と現実は合わないものだ。理想どおり習慣化できている私の生活は、通勤の道順を含めてもわずかである。たいていは、その場かぎりの思いつきで対処している。だから自分が何をやったのか覚えていることが少ないし、あとになって苦労することも多い。

たとえば、部屋の片付けである。半年間の外国滞在から帰国してから数ヶ月がたつが、未だに片付けられない。半年間に溜(た)まった書類と、外国滞在のために増えた持ち物、部屋の模様替え等のために、もう何がどうなっているのかわからない。片付けても片付けても、気がつけば、まだ幼い息子が引き出しをひっくり返していたりする。おおげさに言えば、もう絶望的で、ときには発作的に何もかも捨ててしまいたいと思うほどである。

これが習慣化すればどんなに良いかと思う。手に書類を取れば、何も迷わずに、すぐに手はどこかに動く。そして、その動いた場所は思い出さなくても手が覚えているとしたら、なんと素晴らしいことだろう。

しかし通勤の「手順」が習慣化したのは、何年も繰り返してきたからだ。とすれば、部屋の片づけもまた繰り返すしかない。何度も何度も苛立ちながら、自分のだらしなさを嘆きながら、片付け続けよう。そうすれば、いつかは習慣化され何も考えなくても楽に部屋は片付くのかもしれない。雑然とモノが散乱する様子を前にして、私は呆然と、そんな夢想にふけっていた。

（知）

……ききみみずきん

道標

「私の前に道はない。私の後ろに道ができる」とか「道の曲がり角の向こうに何があるか分からない」という言葉を知ったのはずいぶん前のこと。電動車いすで、区内を走りながら、ときどき知らない角を曲がって、曲がって、違う雰囲気の町内を通る時は心が弾んできます。そんな時、通り過ぎる猫が振り返ってくれると、何か良いことがありそうな気がして付いて行きたくなります。しかし、電動車いすでは狭い路地奥に入るわけにもいかないし、ましてや塀にも跳び上がれません。付いて行けないもどかしさを感じながら、現実の自分の影に納得してしまいます。5月1日の毎日新聞紙面に「この道を頼りに歩く人がいます」～点字ブロックをあけてください～というAC公共広告機構の広告が掲載されていました。点字ブロックを頼りに歩く視覚障害の人には、それを外れたり寄り道はできません。それはたんなる道案内ではなく、駅のホームや階段などでは1本の命綱のような役目もあると聞きます。点字ブロックをまたいで、そこからはずれてしまうと自分の位置が分からなくなるそうです。それにしても島型ホームでは上り下りの線をどのようにして分かるのかと思っていましたが、構内アナウスの声が男女区別されているそうです。障害の持つ人それぞれに「道標」は異なりますが、それぞれを大切にしたいものと思います。　（け）

「谷間」にこだわり続けて 12

赤松 昭

―地域間格差という谷間(その2)―

「寛太くんの事故以来、毎日が大変なのにもかかわらず、そうした状況がなかなか解決には至っていない。おまけに、今回事業所がサービスから撤退するということを市としてどう捉えているのか」。交渉の席につくなり、私たちは担当者に迫りました。それに対する市側の説明はおおよそ以下のようなものでした。

「実は中野さんにサービスを提供している事業所の職員が突然辞めてしまったために、やむなくサービスの後退という事態になってしまった。中野さんのご要望には出来るだけ応えていくつもりだが、残念ながら撤退した事業者に代わる別の事業者がなかなか無い。だから今後どう支援していくかはこれから真剣に検討していく、ということで、何卒ご理解願いたい」

私たちはこんなに一生懸命やっているのに―そんな気持ちが言葉の端々に表れている感じを受けました。おそらく担当者は本当にそう思っているのでしょう。だが実際に今、サービスの一部を打ち切られては、寛太くんやその家族の生活に大きな支障を及ぼすのです。だから、我々も負けずに問い返します。

「これまでこうしてきましたとか、これからこういうことを検討します、ということももちろん大事だが、実際に早く体制を整えてもらわないと、明日からの中野さんの生活が成り立たない、こういう現状をどう思うのか」

それを聞いた係長が語気を強めて言い返してきました。

「そうは言っても現実問題として、サービスを提供してくれる事業所がない、という現状はどうしようもない。イヤだというのを無理矢理やらせるわけにはいかないんですよ」

我々の申し入れに対して、「現実の問題として」に始まり、「ご理解いただきたい」で終わる回答がこの後も延々と続きました。議論は平行線、というかループに陥ってしまったのです。いい加減机を叩きたい気持ちになってきましたが、これ以上強硬に主張して中野さんと市との関係を悪化させるわけにはいきません。交渉開始から2時間。市側の回答に納得は全然出来ませんでしたが、今後は可能な限り、サービスの継続に努めてもらうこと、交渉を継続することを念押しして、とりあえず私たちはその場をあとにしました。

(続く)

ありがとうございました。

カンパ、サロングッズのお買い上げ、ありがとうございました。

岡賀寿子、風智恵子、富田万里子、藤井さゆり、その他の方々。(敬称略)

美智子のこんな話

岸田美智子

生活アングル

「障害者自立支援法案」審議へ

障害のある人たちの生活が大きく変わろうとしている。今国会に提出されている「障害者自立支援法案」。現在、提供されているサービスの再編と介護保険のように定率負担を求めるのが改正の柱だ。障害者からは、負担増などへの不安が聞こえてくる。（森川 明義）

地域での生活奪われる

負担増へ不安深刻

「生きていく形が変えられるのでは」内容、法律が通ると施設に入らざるを得なくなるかもしれない。障害者の地域生活を支援している自立生活センター「まいど」（大阪市住吉区）代表の岸田美智子さん52は、不安と怒りに満ちた思いで、法案の成り行きを見守っている。

岸田さんには脳性まひの障害があり両手両足が不自由。生活のほとんどの部分に介助が必要だが、1999年からアパートで一人暮らし。

生活を支えるのは、2003年4月に始まった「支援費制度」。市町村が障害者の必要に応じ、居宅介護（ホームヘルプ）や外出などを援助する移動介護（ガイドヘルプ）のサービス支給時間を決めている。岸田さんの場合は、月に約380時間だ。

法案では、全国一律の基準を設け、このホームヘルプを障害程度（区分）に応じ、国としての支給時間に上限が決められるようになる。しかし、国は区分ごとの詳細を示しておらず、利用者の不安は高まるばかりだ。

岸田さんは「今でも100時間以上足りないのに、減らされると地域での生活はできない」と心配する。

■ □

ガイドヘルプも仕組みが変わる。東京都三鷹市の太字非常勤講師岡部耕典さん49の長男、亮佑さん12は自閉症で支援費から月70時間の身体介護、ガイドヘルプなどを受けている。しかし、この時間では足りず月に30～50時間分を自己負担している。

障害児（18歳未満）のガイドヘルプは、支援費制度によって初めて認められたが、法案では特に重度の人たちへのサービス「行動援護」以外は減らされる可能性もでている。岡部さんはこの法律は、利用者の声を聞かずに作られている」と指摘する。

■ □

サービスの変化とともに利用者が不安にさせているのが、これまでの応能負担から応益、定率負担へ変わることだ。障害基礎年金2級だけで年収80万円の人でも月に7,500円、年収が300万円を超えると4万7,200円を上限に徴収される。

1級の年金と給料などを合わせて月収約15万円という岸田さんは、月額2万4,600円を支払う息込みで今でもぎりぎりなのに生活できない。そうなるくらいなら負担のない生活保護の方がいい。これでは自立支援というより自立阻害法」と憤る。

国会での審議は連休前後に始まる見通しだ。

仕事の合間に介助者と談笑する岸田美智子さん（左）。このままの生活が続けられるか不安を感じている（大阪市東住吉区で）

読売新聞2005（平成17）年4月9日付朝刊

新聞に取りあげられました

いよいよ、5月中ごろに、国会に上程された障害者自立支援法案が審議されます。

5月の連休明けには、全国的な障害者団体の抗議行動が予定されており、この文章がみなさんに届く頃にはもう終っています。

ガイドヘルパー制度も地方まかせにするのではなく、個別給付で保障してほしいと言う声も出てきたりしています。議論の焦点である応益、定率負担の問題、全国一律の基準をホームヘルプ制度に設けることなど、どのような決着がついていくのか、しっかり見守っていきたいものです。

私事になりますが、読売新聞にこの自立支援問題がやっと取り上げられましたので、みなさんもお読みになってください。

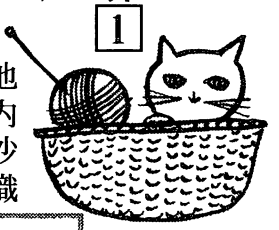
○連　絡　先
自立生活センター・MY-DO～まいど～
〒558-0002
大阪市住吉区長居西1-9-12キミハウス1階
TEL 06-6609-3133
FAX 06-6609-3210

サロンの絵はがき
5枚1組￥180-

ひとつずつ ひとつだけの世界 1

――多機能ひざ掛け

池内沙織



幸せは人と人とが出会うことから始まります。１人でいるより、２人、３人・・・たくさんの人たちと出会い、つながって、助け合えたら楽しいですね。そんな気持ちで人と人との間にある、人に優しいモノづくりを目指しています。私、「手沙繰工房」の池内沙織と申します。今度「ひとつずつ　ひとつだけの世界」を連載することになりました。しばらくお付き合いください。

今回は仕事・食事の時には室内で使え、雨の日・風の日・雪の降る寒い日の外出にも使える、室内・室外両用の「多機能ひざ掛け」をご紹介します。

車いす使用の山本さんの協力とアドバイスで、サイズ、形、ポケットの大きさと位置・・・などに加えて「違和感なくカッコよく映りたい」という思いを込めて作りました。

ひざ掛けの上部についたゴム輪を車いすの手押しグリップにくぐらせて固定出来ます。またＳ字フックやひもをゴム輪につけることで、より使いやすくもなります。ご希望で、ひもをお付けします。段差による衝撃でずり落ちたり、突風に飛ばされることもなく、美しいシルエットを保ちます。

片面はカシミヤ、片面は防水コーティングした布を使ったリバーシブルになっていますから、冷たい風の浸入をシャットアウトし、雨水や汚れ、ハネ，食べこぼしなどは、軽く拭くだけでOKです。保温性もバツグン！　エプロンとしてもお使いいただけます。

□サイズ

98㌢×74㌢

□色別在庫

＊カシミヤがエンジ　コーティング布が、柄＝5枚、ブルー＝5枚、赤＝3枚、グリーン＝6枚・・・合計19枚

＊カシミヤがベージュ　コーティング布が、茶＝1枚、グレー＝2枚、グリーン＝3枚・・・合計6枚

□値段

4000円（送料別）

ゆい・まある（沖縄の方言）
つながり・助け合い・お互いさま

Yuimarl

―問い合わせ先：手沙繰工房☆池内沙織―
〒567-0048茨木市北春日丘4-9-24井上ﾋﾞﾙ101
TEL＆FAX 072-627-8611　携帯090-8129-9115
E-mail:tesagurikobo@hcn.zaq.ne.jp

SALOON

隣組ニュース

６月はどこのサロンの、どのテーマがお気に入りですか。いい出会いしませんか。

■「サロン淀川６月の出会い

日　　時：６月１９日（日）午後１時30分～４時
内　　容：ビデオ鑑賞「となりのトトロ」
～予約の取れない行列が出来るパピリオン、愛知万博サツキとメイの家ってどんな家。ビデオ「となりのトトロ」で観ませんか～
会　　費：なし
場　　所：淀川区民センター「やすらぎ」
大阪市淀川区三国本町２－１４－３
問い合わせ先：淀川区社協（ボランティア・ビューロー）☎ ０６－６３９４－２９００
E-mail：sorajii@iris.eonet.ne.jp

■「サロン・にし」６月の出会い

日　　時：６月１１日（土）午後１時30分～４時
内　　容：電動車いすを体験しよう！
場　　所：西区在宅サービスセンター６階
ボランティア・ビューロー室
大阪市西区新町4-5-14　（西区役所隣）
地下鉄＝西長堀駅 4-A号 出口からすぐ
市バス＝地下鉄西長堀駅からすぐ
☎ ０６－６５３９－８０７５
会　　費：なし
問い合わせ先：関口 ☎ ０９０－４２８１－５６４１

■「サロン・にしよど」６月の出会い

日　　時：６月２５日（土）１時30分～３時30分
内　　容：読書のお手伝い
ゲ ス ト：中家（なかや）恵美子
場　　所：西淀川区在宅サービスセンター「ふくふく」
参 加 費：なし
問い合わせ先：西淀川区在宅サービスセンター
☎ ０６－６４９４－０６３５
中本 ☎ ０９０－９８６４－９６７８

■サロン「アイ」６月の出会い

日　　時：６月１１日（土）午後１時30分～４時
内　　容：聴覚障害者の生活と手話教室
パネラー：吉川昭作氏（デフ・ワークス所長）
会　　費：なし
場　　所：「おかちやま」２階ボランティアルーム
大阪市生野区勝山北３－１３－２０
問い合わせ先：生野区社協（ボランティア・ビューロー）☎ ０６－６７１２－３１０１
○お知らせ：サロン「アイ」だよりの音訳テープが出来ます。ご希望の方は、西浦まで。
☎ ０６－６７５７－８５７４

■「てくてくすみよし」６月の出会い

日　　時：６月１２日（日）午前１０時～午後３時
内　　容：お好み焼きパーティー
場　　所：あびさんサロン
大阪市住吉区我孫子3-10-16
会　　費：２０００円
申し込み締め切り：６月１０日（金）
申し込み・問い合わせ先：
山本篤江 ☎ ０６－６６９２－８４１１
携帯０９０－５１６８－５９７７

■「サロン・つるみ」６月の出会い

日　　時：６月５日（日）午後１時30分～４時
内　　容：季節に心をこめて撮る
～スライドを観ながら楽しむ。
写真はシャッター・絞り優先より、心優先モード～
講　　師：窪田新一氏（「サロン淀川」代表）
会　　費：なし
場　　所：鶴見区民センター３階
大阪市鶴見区横堤５－３－１５
問い合わせ先：鶴見区社協（ボランティア・ビューロー）田村 ☎ 06-6913-7070

■「サロンいたみ」６月の出会い

日　　時６月１８日（土）午後２時より
内　　容：大道芸、お楽しみ会
会　　費：なし
場　　所：伸幸苑（伊丹市寺本６－１５０）
申し込みと問い合わせ先：
黒野 ☎ ０７２－７８１－３５４９

声で読書のお手伝い

音訳テープのご案内

音訳グループ「糸でんわ」のご協力で〈サロン・あべの〉紙第226号の音訳テープが出来ました。

■音訳テープ文庫

(a) 〈サロン・あべの〉紙は、第１号より第226号までそろっています。
(b) 〈サロン・あべの〉十周年記念誌「はあとが、はろー！」
(c) 絵本「未知の記憶」（作・絵 中川勝彦）
(d) 「ラジオたんぱ」放送「〈サロン・あべの〉平成7年5月の出会い」放送分（３０分）
(e) エッセー集「逃げた『ヨナ』～ボランティア活動の周辺～」（岡本栄一著＝糸でんわ音訳）
(f) 「キミたちだけじゃ困るんだ～身障者だけで旅した十余年～」（山田誠１９９５・２・２２著 ＝糸でんわ音訳）
(g) 「金子みすずへの旅」（島田陽子著＝糸でんわ音訳）
(h) 「夕やけ空のオニヤンマ」（牧口一二著＝糸でんわ音訳）
(i) 「ガベちゃん先生の自立宣言」（曽我部教子著＝糸でんわ音訳）
(j) 「セルフヘルプグループ」（岡知史著＝糸でんわ音訳）
(k) 「名物　天王寺かぶら」（猿田博創作　難波利三監修＝大阪市立天王寺図書館制作）
(l) 「知らされない愛について」（岡知史著＝ぽけっと音訳）
(m) 「愛　ひとり旅」（奥田真祐美著＝糸でんわ音訳）
(n) 「奥田真祐美のシャンソン手帳」（奥田真祐美著＝糸でんわ音訳）
(o) 「もうちょっと知っとく？　私たちの阿倍野」（難波りんご著＝糸でんわ音訳）
(p) 「猫とシャンソン」（奥田真祐美著＝糸でんわ音訳）
(q) 「ほんの少しの神に近い部分」（岡知史著＝糸でんわ音訳）
(r) 「勁くしずかに」（河野勝行 編・著＝糸でんわ音訳）
(s) 「たまごが　ポン！」（稲垣恵雄著＝糸でんわ音訳）
(t) 阿倍野名所旧跡いろはがるた（猿田博＝糸でんわ音訳）
(u) 交わりのなかで　～ホームヘルパー残像～（加藤みどりさんを偲ぶ文章を作る会著＝糸でんわ音訳）

ご希望の方には、ダビング、または貸し出しをしますので、冨田（☎０６・６６９１・１０２８）まで。

寄りみち

この４月から＜サロン・あべの＞は20年目に入りました。－出会い・ふれあい・助け合い－は、まだまだ続きます。この間、他の区にもサロンが誕生しました。ご近所の市にも出来て、隣組が増えました。どこのサロンもそれぞれに特色ある活動をされています。そこで、＜サロン・あべの＞の今年は「サロンよいとこ、こんなとこ」をテーマに、この１年、よその「サロンよいとこ、こんなとこ」はどんなんかなあ。と、拝見させていただこうと思っています。（石）

＜サロン・あべの＞VOL. ２２７　発行：平成１７（２００５）年５月２１日　定価￥１００
編集人：＜サロン・あべの＞運営委員会　表題：中西利香・筆　文中イラスト：石田美禰子
事務局：〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町６－３－２６ 冨田慶子方＜サロン・あべの＞
TEL・FAX 06-6691-1028　郵便振替口座：サロン・あべの 00950-9-26941
印　刷：セルフ社 〒546-0044 東住吉区北田辺町4-23-2 ミスターＤビル２Ｆ TEL06-6719-8212
本紙はホームページでもお読みいただけます。書庫は、http: //pweb.sophia.ac.jp/~t-oka/salon/

一九九一年九月三日第三種郵便物認可（毎日発行）

発行人：関西障害者定期刊行物協会［大阪市城東区東中浜2-10-13緑橋グリーンハイツ１Ｆ］